



価格は在来工法住宅より五パーセント前後、プレハブ住宅より十パーセント高いとされている（これは性能の上からいって単純に比較できないが）。

それは、2×4工法の生産性が悪いといったことではなく、既存の資材流通業者、建築業者（大工・工務店）にとつて、いまのところ、在来工法よりも利益がとれないといったことから敬遠されるという事情がある。それだけに、たとえ前述した大手企業にしても、現実には、2×4工法を供給するには高級イメージを前面に打ち出し、高価格でいかにざるをえないという要素も強い。

しかし、だからといって、2×4工法住宅は今後も高価格のまま推移していくということにはならない。2×4工法用資材は製材、合板、石こうボードといずれも少品種大量生産品であり、2×4工法に適した生産体制が整ってくれば、コストダウンの可能性は残されている。あるいは、限定プラン販売といった形で、

供給サイド（資材メーカー、流通業者、建築業者）、消費者双方に利益のある方式を考えていかなければなるまい。

なんとといっても、2×4工法の最大の特徴は、構造体（シエルト）と化粧仕上（フィニッシュ）が分離されていることだ。だから極端に言えば、安く2×4

工法住宅を建てようと思うなら、雨露をしのげる程度の構造体を建築業者につくってもらい、その仕上げ（壁紙、ペイント、化粧ボード等）を施すみずからが施工してしまうことである。北米、加のDIY店（日曜大工店、ホームセンター。昨年だけで七兆円以上の市場規模を記録している）は、むしろそうした需要層のためにあり、前述した商品に限らず、キッチンセットや洗面化粧台、収納セットなどの住器類さえ、その店の重要商品となっている。

つまり、そこでは住宅を買う際の価格の選択度が非常にフレキシビリティをもっているということであり、それだけ住宅の需要層が広がることになる。住宅価格の高い安いは、わが国のように構造体（柱）によってきまるのではなく、施工は仕上げの差によって、デコレーションの差によつて、自分の所得に合った形で決めればよいのである。わが国でも、建て主参加の住まいづくり方式も生まれてきているが、まさにそのフレキシビリティを先どりした方法であろう。

とにかく、2×4工法は、構造強度は国の保証付、また石こうボードなど不燃材を使えば防火性はもちろん遮音性は申し分ない。箱形住宅だから気密性（保温性、断熱性）もよく、現実には厳寒でもセントラルヒーティングは必要とせず、暖房費も従来の二分の一も節約できたという話は各地で生まれている。

心配な点は、結露など湿気の問題である。この点については、室内側に防湿シートを貼った断熱材の工夫とか、今後も早急な改善策がとられようが、小屋裏利用、

換気システムの導入、といった空間利用によつて、日本での湿度対策がとられていくだろう。

しかし、クレームといった点では、「2×4工法を建設してみても、クレームは在来工法の場合よりも三分の一に減った」（S不動産）というのが一般的であり、それだけメンテナンスも容易だということとは、これまた2×4工法の特徴だろう。

最後になったが、2×4工法は単なる住宅本体のメリットにとどまらない。タウンハウスなどのように土地の有効利用をはかった新しい住宅の供給方式は、狭い国土のわが国においては最適といった

評価が高まり、またその普及も徐々に行なわれていくだろう。

いずれにしても、2×4工法のがわが国住宅業界に与えたインパクトは実に大きいものがある。逆にいえば、建設省などがこれだけ2×4工法普及のための条件整備（各種性能の実験）をしてきたのだから、もっと2×4工法住宅は普及していくはずだが、それには住宅資材業界、大工、工務店が2×4工法を取り扱える仕組みを考へることが大事である。また、一般消費者がどこにいても2×4工法住宅を注文できるべく、その供給体制が整うことが待望されよう。

